パネルディスカッション：
首都大学東京の基礎教養課程を検証する

基礎教育センター長
上野　淳

標題のPDを行うことになった。これに先立つ10月の第2回FDセミナーでは、「首都大学東京の基礎・教養教育の現状について」をテーマとして、本学の基礎教養課程の基幹的な仕組みである実践英語科目、基礎ゼミナール、情報科目、都市教養プログラムのそれぞれについて、SEの調査結果などに基づき、各部会長から報告を頂き、現状について多角的に討論頂いた。FDレポート3号に詳しく記されているように、それぞれの授業科目の資質は高く、改善に向けての取組も健全に行われていることが確認できた。

今回のPDはこれを受けて、「本学の基礎教養課程全体像を検証する」、との趣旨で開催された。基礎教養課程を主として担っていただいている、人文・社会系と理工学系の神崎学系長、奥村学系長にパネラーとして参加していただき、加えて、前教養部長である丹治教授にも登壇頂いた。司会は基礎教育センター長・上野が務めた。

議論のテーマは、基礎教育センター長として常々気になっている諸点を採り上げ、パネラーの見解を問う形ですすめさせて頂いた。議論の内容は多岐にわたるので、主要なテーマと論点を記すにとどめる。

(1) 首都大学東京の基礎教養課程の仕組み

前述のように、それぞれの授業科目の資質は高く、学生の評価・満足度も一定程度高い水準を維持している。しかし、これら全体を組み合わせた基礎教養課程の仕組みとしてみた場合はどうか。今後も多角的な検証が必要となる。

例えば、基礎ゼミナールや情報リテラシー実践などを全学必修としている意義の吟味など、完成年度に向けて尚多角的な検証が必要となろう。

(2) 都市教養プログラムの全体的枠組み

基礎教養課程の基幹的な仕組みである「都市教養プログラム」について、果たして「都市に関して総合的・学際的に学ぶ」仕組みに成り得ているか、不断の検証が今後必要になる。特に4つのテーマ×4つの学系に位置づけられているそれぞれの授業科目のメニュー配置は適切か、などについて全学横断的な検討組織が教務委員会とは別途必要となろう。各テーマにプロデューサーを置いて総合調整を行う仕組みなどが考えられる。

(3) 共通基礎教養科目、特に理工系共通基礎科目の授業運営について

数学、物理などの理系基礎科目は理工系の学生にとって、極めて大切な授業科目である。しかし、受講生100名を超す授業、数学・物理などにおける学力差とその分布幅の拡大、など現状には多くの課題が山積している。又、高校での履修歴や入試に課されている科目構成によって、各コースの学力差はかなり大きい現状が報告された。少なくとも、授業規模の適正化や、履修歴によるクラス編成など、適切な手段を講じていくことが必要である。

(4) 首都大学東京学生の基礎学力と資質

高校での未履修、各コースの入試科目構成等によって、本学学生といえども基礎学力に差が目立つようになり、リメディアル教育の必要性も検討せざるを得ない状況にある。加えて、主体的に学ぶ意識や自己形成力の低下なども顕在化しており、総合的な意味での「知のキャリア形成支援」が必要となると実感される。

右から上野教授、神崎教授、奥村教授、丹治教授